

第614回

九州朝日放送番組審議会議事録

—— 2019年6月度 ——

◇ 開催日

2019年6月17日(月)

◇ 議題

<テレビ番組>

「ガマダセ動物園3

～動物たちの幸せのため大奮闘！台北パンダも登場～」

<放送日時>

5月26日(日)13:55～14:55

◇ その他

九州朝日放送株式会社

第614回 番組審議会議事録

1. 開催年月日 2019年6月17日(月)午後3時30分～5時00分

2. 開催場所 九州朝日放送 本社役員会議室

3. 委員の出席

委員総数 8名

出席委員数 8名

委員長	野田	幸之輔
副委員長	池田	勝
委員	赤木	由美
委員	鶴	利絵
委員	安恒	万記
委員	戸田	康一郎
委員	守田	有理子
委員	山崎	靖

欠席委員数 0名

放送事業者側出席者名

代表取締役社長	和氣	靖
取締役	笹栗	哲朗
取締役 総合編成局長	森	君夫
ラジオ局長	穴井	建一
報道局長	臼井	賢一郎
コンテンツ局制作部副部長	野村	友弘
ケイ・ビー・シー映像制作部	須佐	幸二
番組審議会事務局長兼視聴者・広報室長	井上	千秋
番組審議会事務局（視聴者・広報室）	松永	俊郎

4. 議題

(1) テレビ番組

「ガマダセ動物園3～動物たちの幸せのため大奮闘！台北パンダも登場～」

<放送日時> 5月26日(日) 13:55～14:55

(2) 2019年6月・7月 ラジオ・テレビ番組編成状況の報告

(3) 2019年5月 視聴者・聴取者応答状況の報告

(4) その他

5. 議事の概要

◎委員の意見 (概要)

委員からは、

- 従来の「形態展示」ではなく、動物の自然な生態を見せる「行動展示」が全国的にブームになっているが、今回の大牟田市動物園の「動物たちの幸せのために」というコンセプトは、さらに奥が深いものを感じた。「ハズバンダリートレーニング（健康チェックや治療がしやすいように動物に協力してもらう訓練）」は初めて耳にしたが、飼育員たちが毎日長期間にわたって動物への訓練を積み重ねる様子には本当に感心した。何事も「無理」と決めつけず、動物園を飛び出して色々な人たちとつながり、活路を見出す飼育員たちの行動力には敬服した。
- 新たな取り組みを進める地方の小さな動物園が世界に活躍の場を広げている姿は感心するばかりで、仲良くフットワークがいい飼育員たちの努力には頭が下がる思いがした。中でも「ハズバンダリートレーニング」として、イノシシの肉を毛皮がついた状態でライオンに与える試みは大変ユニークで印象深かった。単に客集めを目的とせず、動物に対して真剣に向き合っている姿勢が伝わった。
- 番組の「動物が人間と同じように幸せになる権利」というフレーズに、番組制作者の優しさと根本的な誠実さを感じた。動物園の飼育員たちは当然だが、制作サイドの愛情を番組のあちらこちらで感じる内容だった。
- 動物園の飼育員たちの裏側を知った番組制作者に、その努力を伝えたいという強い熱意があったのだろうと感じたし、その熱意は十分に視聴者に伝わったと思う。番組と動物園が一緒になって番組を作っている雰囲気は伝わり、その一体感が視聴者に安心感を与えていると感じた。
- 大牟田市動物園の取り組みが(他のメディアも含めて)取り上げられることはあるが、一過性の話題提供に終わっているケースが多い。当番組のように深く入り込み、継続的に情報発信しているものは少なく、地域に根差したローカル局として、よい取り組みだと評価したい。
- 盛りだくさんの内容で、動物たちのために奮闘する飼育員たちの姿が徳永玲子さんのナレーションと共に生き生きと描かれていた。徳永さんのナレーションは「アサデス。KBC」と同様に元気で番組にとっても合っており、最初からわくわく感を醸し出していた。

などの評価を頂きました。

一方、気になる点や望むこととして、

- 1 時間の番組は内容盛りだくさんで、見ていてやや疲れた。大牟田市動物園の飼育員たちが台湾の動物園に視察に訪れる様子も紹介されていたが、60 分の番組内で 2 つの番組を見ているような感覚さえ抱いた。
- 動物園の飼育員たちが動物の死とどう向き合っているのか、本音の部分にももっと踏み込んで欲しかった。飼育員たちの葛藤やジレンマにどう向き合い、どう感じて、何を考えているのか、もっと知りたかった。
- ホワイトタイガーはもう飼育しないという大牟田市動物園のポリシーが紹介されていたが、人為的に作り出された珍獣がなぜ幸せになれないのか、もう少し丁寧な説明があってもよかったのではないか。小さい子どもが見て正しく理解できるのか、少し疑問に感じた。
- 徳永玲子さんが子どもと一緒に「うーう！」と言ってからタイトルコールをするシーンがあったが、普段のレギュラー放送を見ていない視聴者には「うーう！」の意味が伝わらないのではないかと思った。

などの批評や提言を頂きました。

これらに対して、担当者からは、

- 動物園の飼育員たちを継続的に取り上げる企画はあまりないが、動物を育て、命を見守る「人間」に焦点を当て、その重要性を訴えているのだという自負がある。このことが今後の動物園の存続にもつながるとの考えから取材を続けている。
- 飼育員たちの探求心はとても高く、帰宅後も動物の勉強に取り組んでいる。番組で紹介したレッサーパンダ担当の飼育員は自分を成長させるため、自費で（野生のレッサーパンダが生息する地域へ）旅行に行ったが、そうした姿勢や頑張っている様子を伝えたかった。
- 番組の制作にあたり、子どもたちが理解できる視点で何が伝えられるかを考えている。本来なら動物園が抱える問題も掘り下げる必要があるが、子どもが見ても飽きない番組にするため、重たいテーマは小出しにするなど工夫をしている。
- イノシシの肉を猛獣に提供する場面は、朝のレギュラー番組内では紹介が難しい。日曜午後の 60 分番組だったからこそ表現できたし、60 分番組を作った意義だったと考えている。
- タイトルコールには番組を印象づける意味合いがある。スタジオで「動物園を応援しよう（ガマダセ！）」と始めたところ、「うーう！」と言ってからの方がみんな声そろえやすく、「うーう！ガマダセ」とのタイトルコールが定着した。今回の番組でも定番のコールとして使用した。
- 廃園の危機にあった大牟田市動物園には今や年に 20 万人以上が訪れている。地域の知られていない情報を取り上げ、動物園は来園者を増やし、KBC も番組の人気コーナーが毎月制作できるという意味で、本当にウィンウィン（Win-Win）のモデルケースのような番組だと思っている。

などの説明をしました。